

多摩川

長唄

全詞章

永井素岳 作詞

五代目杵屋勘五郎 作曲

明治四十一年（一九〇八）九月

〔本調子〕 それ帝都二百余万の民草が、潤ふ水のみなもとは

とほ 遠く丹波の山澗に発り、青苔衣を負ひて、巖の肩にかかり、白雲帯に似て山の腰を繞る
ひる 昼も日原の影暗く、轟然として荒まじき

〔六下り〕 高く御獄の麓より、和泉中島流れて末は多摩川の、雨には異なる渡り口
晴れて客呼ぶ鮎漁が、鵜縄のさばきおもしろや

〔本調子〕 昨日の袖も乾しやらで、まだき濡れそふ朝露に、浪も光を打ち寄する
むかしこひ 昔恋しき調布は、賤が手業に時ならぬ、河原に雪の白々と、さらす乙女が拍子うた

〔二上り〕 六所祭はさまざまあれど、わしが好いたは帷子市よ、ずんとはじめは麻布織りて
くに 国へみつぎの余りは、誰に、たれに着しよとて糸紡ぐ

ソレソレ晒せ晒せ、晒す細布さらさらさつと、晒す細布さらさらさつと、つきぬ流れは
たまがは 多摩川の里